



ら写したと思われるもので、草原の向こうに工場の建物が広がっているように見えます。絵葉書中央に書かれた説明は「撫順龍鳳採炭所巻塔」です。コンクリート製構造物の呼び名が堅坑櫓だとすれば、その機能(役割)に注目した時に「巻塔」となります。エレベーターのように籠(ケージ)を上下させる役割があります。写真3は写真2の上半分を拡大したものです。

す。1932(昭和7)年に満洲国が成立し、1945(昭和20)年の敗戦まで続きました。旧満洲は現在是中国東北部と呼ばれています。かつての満洲国の首都は新京(現在は長春と呼ばれる)で、撫順は露天掘りの炭鉱としてもよく知られていました。龍鳳採炭所を経営したのが満鉄でした。

会編・発行、一九八三年) なぜ堅坑櫓が必要とされたのかを説明した文章もありました。 龍鳳大堅坑は其の能力一日出炭五、〇〇〇噸である。現在地表から三七〇米の所にあり、一番坑道から、更に下部に発展して将来は五七〇米の所に二番坑道、七七〇米の所に三番坑道を作る予定である。其の時は捲網は太り、且つ長くなる。(『炭礦読本』南満洲鉄道株式会社撫順炭礦編・発行、一九三七年)

今回は私が持っている2枚の古絵葉書(写真1・2)を紹介することにします。写真1の門柱には「龍鳳採炭所」という門標がかかっています。後ろにそびえているのが堅坑櫓です。どうですか。志免町の堅坑櫓と間違えそうなくらいによく似ています。

写真1の左上に小さい字で説明があり、「一日の出炭一万噸、東洋一の大堅坑と称す龍鳳採炭所。」「撫順全集」と書かれています。「撫順全集」という袋に入った、何枚組かの「撫



日露戦争に勝利した日本はポーツマス条約により、ロシアから鉄道事業を受け継ぎました。その経営に当たったのが南満洲鉄道(略称 満鉄)で

龍鳳採炭所は老虎台採炭所の東に隣接、走向延長約五キロメートルを三坑(三つの坑口)により採掘していた。当採炭所区域は浅部採掘を終っており、一九三三年(昭和八年)から龍鳳大堅坑の開発に着手し、一九三六年(昭和十一年)から採炭を開始した。本堅坑の捲揚機はケーベ式(井戸つるべ式)五四〇〇馬力を採用し、高さ六四メートルの捲(まき)櫓の上部に設置したので一大偉観を呈し、撫順名物とされた。(『龍鳳』満鉄撫順炭礦龍鳳

つるべの滑車の役割をするもの(巻上機)です。鉄骨の柱の間をレンガで埋めて壁にしたようです。

夫を考慮に入れて捲機を地上に据へ付けるのをやめて建設費は高いが捲櫓上にプリーをおく事にし捲櫓全体を被包し(回りを覆うこと)堅坑内と同一温度に保つことにし、捲網を外気に曝することを避けたのである。捲櫓は鉄骨構造とし煉瓦壁を施し其の高さ六七米となし五四米の所に捲機を据付けてある。(同)

さて志免町の第5次総合計画の用語解説に「旧志免鉱業所堅坑櫓」の説明がありまして(一部表記を変更)。

地上47・65メートル(基準点からは53・65メートル)、鉄筋コンクリート造のワインディングタワー形をしている(すなわち「巻塔」です)。昭和18年に櫓が完成し、塔内には1、000馬力のケーベ巻上機が備わり、地下430メートルまで鉱夫や石炭、資材の搬入を行っていた。この時代の

同タイプのものは、日本で志免町だけであり、世界でもベルギーブレニー炭鉱・中国撫順龍鳳採炭所にしか所在が確認されていない。平成21年12月8日に国の重要文化財に指定された。

地上部分が巨大な構造物である堅坑櫓は、地下深くまで垂直に人や物資や石炭を上下させるためのもので、底に降りると、そこから横方向に掘られた坑道が張り巡らされ、その先端部で石炭を掘っていたのです。それだけの投資を回収するだけの、石炭の莫大な埋蔵量が想定されていたことは言うまでもありません。

龍鳳採炭所の堅坑と比較できると、志免町の堅坑櫓をぐるりと撮影してみました。シーメータの駐車場から右回りに撮影しました。写真8では下にひさしのようなものが見え、上には張り出しがありません。他の3面には張り出し部分があります。これに対し龍鳳採炭所は左右に対称的に張り出し部分があります。



志免町の堅坑櫓は中程より下は柱だけで、壁がありません。龍鳳採炭所と違い、大気の寒

暖差に配慮する必要がなかったからです。写真3では外壁がないので、龍鳳採炭所は後

から外壁を追加したことが分かります。